

A層～D層についてもっと知りたい！

A層～D層の値って何のためにあるの？

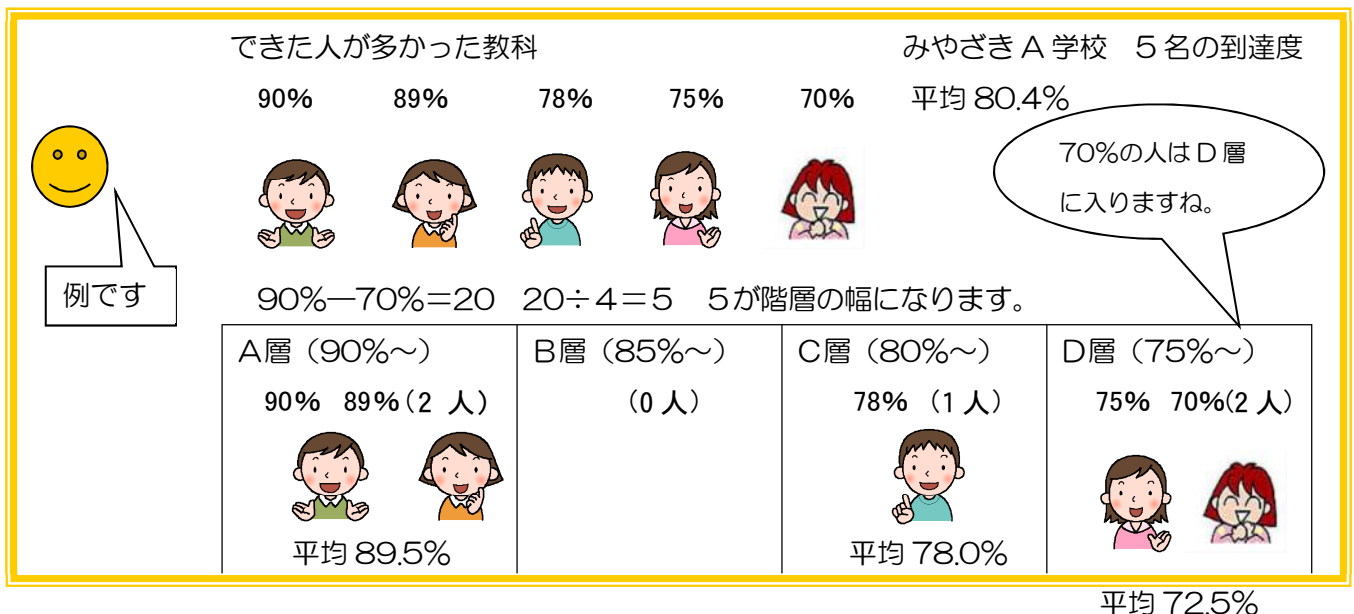
みやざき小中学校学習状況調査は、結果は得点ではなく正答率(できた割合%)で表しています。よって、結果が出たときに、問題ごとの正答率や個人差の大きい問題はどれかなど、集団や個人で**比べるための目印**となるよう示しています。

- A層～D層の値は、同じ教科や教科どうしにおける定着の違いを比べるための目印になるものです。

A層～D層ってどうやって求めているの？

簡潔に言うと、最高点と最低点の範囲を上位から4等分して、A～Dとしています。

- 教科ごとに個人の正答率を出して、集団ごとに最高点と最低点の範囲を求めます。
- 求めた範囲を4等分して、階層を決めます。最も高い層から順に、ABCD層となります。



できた人とできなかった人の差が大きかった教科

みやざきB学校 5名の到達度



例です

90%

70%

65%

20%

10%

平均 51.0%



70%の人はB層に入りますね。

$90\% - 10\% = 80$ $80 \div 4 = 20$ 20が階層の幅になります。

A層 (90%~)	B層 (70%~)	C層 (50%~)	D層 (30%~)
90% (1人)	70% 65% (2人)	(0人)	20% 10% (2人)
平均 90.0%	平均 67.5%		平均 15.0%

A層~D層は、教科別の、個人の正答率を使ったクラス分けのようなものです。単純に人数で均等に分けたものではありません。

A層~D層の分け方はいくつあるの？

教科ごとで、A層~D層をそれぞれ求めています。つまり、下の表のように、小学校は4通り、中学校は5通りあります。

		A層	B層	C層	D層
小学校	国語				
	社会				
	算数				
	理科				

		A層	B層	C層	D層
中学校	国語				
	社会				
	数学				
	理科				
	英語				

教科ごとの分け方は、教科ごとの集計システムの各資料及び支援システムの各資料で利用されています。

A層～D層の数値でどんなことがわかるの？

集計システム【資料1】では

県全体の各層を軸として、その中に各所属の児童生徒が何%いるのかがわかります。

集計システム【資料2、3】では

個人の正答率が、県全体のA層～D層のどの階層に入っているかがわかります。

※印の意味 A層…◎（よくできる） B層…○（できる）
 C層…△（ややできる） D層…▲（がんばろう）

支援システム【資料1】では

県全体の各層を軸として、その中における各所属の児童生徒の正答率がわかります。

支援システム【資料2】では

県全体の各層を軸として、その中における各所属の児童生徒の正答した割合がわかります。

どんなところを見て分析すれば、何がわかるの？

【集計システム資料1では】

- 県全体のA層～D層に、何%の児童生徒がいるかによって、できた教科とできなかった教科がわかります。
- A層～D層の割合を、教科で比べると、教科によって、上位層と下位層のどちらが多い傾向にあるかがわかります。

【支援システム資料1では】

- 分類・観点・領域の各項目において、平均正答率を比べると、教科別の、できた（できなかった）分類・観点・領域がわかります。

【支援システム資料2では】

- 各設問の正答率が、高い（低い）ことで、できた（できなかった）問題がわかります。
- A層とD層の差が大きい問題は、できた児童生徒とできなかった児童生徒の差が大きい傾向の問題であることがわかります。